
気まぐれ勇者の召喚士

東上尊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

気まぐれ勇者の召喚士

【Zコード】

N3070W

【作者名】

東上尊

【あらすじ】

俺小説です。ある日彼はチンピラから女の子を守るために正義を振りかざして逆に殺されてしまいました。そして気がつくと神の住まう天界、そこで神が偶然創りだした召喚獣を召喚できる力が手に入る液体、それを彼に飲ませたのだ。そして彼は神様に異世界を救うように命令されるのだ。異世界を救えば何やら天空軍と呼ばれる天界の部隊に入れるらしい、しかし彼はそんな事望んではない。しかし彼は容赦なく異世界へ送られ、そしてそこで

勇者として世界を救う旅をするのだった。

2011/10/31から更新始めます。
・・・

プロローグ

人の人生は長いように思えて砂時計の砂のようになつたり時は過ぎ去つていく。

ほんの数日、数週間つといった時の流れに思えたその瞬間は50年や60年といつの間にか過ぎ去り

老人になつていた、なんてことはよくあることだ。だからこそ若い頃に旅をしたいと

一人旅に出かけたりバカをするのだ。

短い人生をよりよいモノにするためにその一瞬一瞬を大切にするために。

だが、俺の人生は人のそれよりも短く蠟燭の火が風に揺られ消えるようにあつさりと

消えた。あの時チンピラなんかに関わるんじやなかつた。あの時見て見ぬふりをしていればよかつた。

そんな事ばかりを暗闇の中でずつと思つていた。

だがあの時は俺の正義が奴らを許さなかつた。

俺の心が奴らを止めると叫んでいた。

だから俺は行動したんだ。

ドジでマヌケで喧嘩も誰よりも弱いそんな俺が一人の女を守るために

拳を振り上げた。いくどもなく殴られては殴り返す、そんな繰り返し

そして光物を俺は見た、男たちの一人がナイフを取り出したのが見えたんだ。

恐怖に一瞬体が震えるのを感じたが、それでも俺は奴らに決死の覚悟で殴りかかった

その後の事は覚えていない。ただ覚えていることは痛かつた。

冷たく鋭利な物が腹に直接触れてそのまま俺は倒れた。

そのまま視界が暗くなつていいくのを感じながら俺は意識を失つた。その後はずつとこの暗闇の中に入いる。

光も何もないただの暗闇、誰一人見えない孤独の空間。

これが死、これが死ぬということ、まだ16年しか生きていないまだやりたいことも見たい漫画も何一つやり終えていない。

こんな死に方は嫌だ、俺はまだやりたいことがたくさんあるんだ。街のチンピラに刺されてそれでおしまいってそんなの酷すぎる。正義つて何だよ！ 死んじまつたら意味がねえーてか正義語つて死ぬとか

ただのバカじやん、クソ！クソ！クソ！俺のバカ！なんである時助けになんて行つたんだよ！ あの時行かなければ俺は今も生きて街を歩いてたんだ。漫画だつてコンビニで立ち読みだつてできてた

なのに、なのになんで俺はある時・・・・・

暗闇の中叫ぶようにしてそんなことをつぶやいた。すると突然視界が眩いばかりの光に包まれ、次の瞬間。視界は雲を映しだした。

それは空に広がる綿菓子のようなふんわりとした雲、左右にはギリシャにありそうな

年季の入つたアンティークの石像、どこからどう見ても異様な空間。

そんな場所に俺は立つていた。それも大きな人の座り込む椅子の前に

俺は立つていた。その存在は高らかに声を上げ笑いながらいつ言った。

「ホッホッホ、メリークリスマス」

その言葉に一瞬睡然とするが、すかさず突つ込んだ。

「いやいや、今は夏、真夏だ！ クリスマスの季節じゃないからね？ てかあんた誰？ もしかしてここって天国か何か？ 明らかに普通じやない」

「そりが……まだクリスマスじゃないのか……残念
まあーそんなことはどうでもいいか。まずははじめにわしは神様じゃ
それとこには天界、そこにおるザビエルはここへ転生しわしの秘
書をしておる」

聞いてないことを次々とを口にするなーこの人は、てか神様?
神様つてこんなバカそうな人でいいのか? 僕の想像してた神様は
槍持つて海割つて雷降らすそんなのイメージしてたんだけどな
あー

「お前のイメージしたのはオリンポスのやつの事じゃらう。あんな
出来の悪い神と一緒にするでない、わしは最高位の神エルシオン
だ。」

「どうじゃ? わしの偉大さがわかつたか?」

「なんで俺の思ったことがわかるんだよ? それも神様の力つてや
つか?」

てか最高位の神様つて突然言われても全然偉大に思えねえーよ
全く情報の伝わらない村で都会から突然やつてきた総理が俺はえ
らい人なんだぞ?」

なんてことを突然言つても誰も信用しないだろ? それと同じだ、
てかさつきのクリスマスのネタとか口調とか全然偉大さを感じさ
せないんだよな

てかなんで俺はこんな場所にいるわけ? 俺は死んだんだろ? そ
れなら

「おとなしく天国に送つてくれよ」

長く伸びた白ひげとたるんだまぶたがわずかに揺れた瞬間、顎に
手を当て

老人は声を上げた。

「まあー聞け、ついこの前ワシは世界に一つとないある物を創りだ
したのじゃ

まあー作ったといつよりは偶然できてしまつたつと言つべきか、

それは

血液、ただの血液ではない、それは瓶一杯分の量がありそれをすべてのみほすと

「召喚術が扱えるようになる」

「召喚術？ それってゲームとかよくある魔物とかを召喚する能力の事？」

「そのとおりじゃ、じゃが、ゲームとは違つてこの力はあらゆる世界から魔物を呼び出すことができる」

「へえーで？ なんでそんな話しきを俺にするわけ？」

老人は不敵な笑みを浮かべ素早く大きな指先で俺を指さすと、

「お前にそれを飲んでもらう。そしてこの世界とは違うほかな世界そこで世界をひとつ救つてもらいたい。世界を救えばお前に良い事が起こるぞ？」

それはズバリ天空軍の部隊員になれる資格じゃ、どうじゃ？ いい話じゃろ？」

「……意味不明なんですけど。力の事はわかつたけど天空軍って何？ 中一病ですか？ マジで意味不明なんだけど」

「まあーそのことはお前が行く世界を救つた後でしよう。さてザビエル、殺れ」

「え？」

その瞬間、視界に頭の輝く教科書などよく目撃するあの方が現れ俺の口に何かを突き刺すと、ニヤリっと笑いそして喉に生ぬるい血なまぐさい

液体が抜けるのを感じた。

そして続いて目の前に座る神がうれしそうに微笑むと、「よし飲んだな？ さて、続いて能力の事について話そう。まずはじめに

召喚する時は地面にこいついた魔方陣を描く」

そういうと神は俺の額に手を当てる。それと同時に神が言つたそれが脳裏にはつきりと浮かび上がる。

「なんだよこれ」

「まあーこれでこの式は忘れることはないだろー後この魔方陣を書いた後両手をその中心に乗せ『開門』っと叫ぶんだそうすれば異世界のあらゆる場所につながる。そしてお前が望んだ形、属性、強さ、能力、それぞれに当てはまる魔物をその場に召喚することが

できる。その魔物が気に入れば名前をつけることによってその召喚獸を

名前を呼ぶだけで魔方陣無しで召喚できるようになる。それを永久契約といつ。

そしてもう一つ、名前をつけずその場しのぎの召喚の事を一次契約と呼ぶ。

まあーだいたい説明したし、早速異世界へ行つてもらおつか。ザビエルくん

彼を異次元転移させてあげて

「OK! BOSS」

ザビエルがそういうと突然凄まじい速さで手のひらを動かし印を結ぶ。

次の瞬間俺の足もとが紫色の光を放ち、俺は無数の光の行き交う空間へ

飲み込まれた。そしてそれから数分後、俺は白い建物の中に立っていた。

1話・白い空間

真っ白な空間、俺はそんな空間の中、呆然と一つの彫刻を眺めていた。

眺めていた……そう俺は眺めているのだ。

女神のような女の石像を……

というよりも、この空間の出口が見つからないからそれぐらいしか暇を持て余す

手段がないのだ。娯楽は必要だけどさすがに彫刻だけ眺めてるのも辛い。

「飽きた……てかザビエルのやつよくも俺をこんなわけわからんところに送ってくれたな

普通異世界物の小説だと召喚されましたとか平原にいたっとかまあー

こんな密閉空間とかじやないだろ。てか、何、神様は俺に何を求めてるんだ？

ほんと意味分かんないわ

まあーそれはさて置き……これからどうする？

一度、芸術の教科書である考える人の象の格好になつて考える。

椅子がないから空氣椅子でそれを実行……失敗。

「アホか！ どうやつて考える人の格好で空氣椅子やれつてんだよ普通に考えて

両足付けないから、無理に決まつてんじやん」

と、まあー自分に突つ込んだあとで、体育座りで白いるの地面に座り込み考える。

正攻法を考えるが、映画や漫画などで見たり読んだりした脱獄の基本的な奴を試す。

が……失敗、当然ぢやー当然だよね。俺には武器も何も掘る道具がないんだから。

俺は少し削れた爪を眺めながら再び考える。
が、何も思い浮かばない。てか、道具もなしにこんな場所出れる
訳がない。

「とりあえず、アレやってみるか

俺は地面に膝まずき、そのまま地面に神様に教えられたアレを行
する。

が……思わぬことにこきあたつた。

「おーい、神様やあーこれってペンとか筆とか書くもんがいるんや
ないんですか？」

「おーい、ボケヨー！ どうやって書くもん用意すりゃーいいんだあ！
血でも使って書けつてのか、あんやうおーーー！」

数分後……

「ふうーやつべ、ちよつと血流しそぎたか？ なんだか体に寒気を
感じるんだが

ああ……よしやるぞ！」

しかし俺はそのままフリーズ、丸く円に描かれた赤色の魔方陣の
中央に俺自身がダーイブ
べつとりと体に自分の血液がついて、スタンガンでもくらつたみ
たいに
体が動かなくなつた。

ああ……力はいんねえ……もつ無理、もしかして俺つてこのまま
お陀仏になるわけ？

いやいや、せっかく神様に命生き返らせてもらつたのこのまま
誰にも見届けられずに

さよなら、つてないだろ！ いや俺の死に方にはふさわしいけ
どもさ、でも

生き返つてすぐにお陀仏なんてヒテヨーはなしだわ、ああーあの
神様の糞爺と

ザビハゲのヤローーこのまま死んだらもっかいそつちいってやんからなあー！ その時は

必ず……て、アレ……なんか俺の視界の先に中世ヨーロッパにい

そうな

女の人気が写つたぞ？ ああーこれはあの彫刻の女神様か、そりか、俺マジで死ぬのな、

俺を迎えて来たつて腹だろ？ 俺が心のなかでそうつぶやくと曰の前に映り込む

桃色の髪の少女が頷き、壁の方向を見てこ声を上げた。

「アイシヤ、人が神殿で倒れてるの、貴方も来てこの人を持ち上げるの手伝つて」

「え？ 姫さま？ 今なんと？」

「だあーかあーらあー『人』が倒れてるの！」

「え！ ちょ、姫さま、ここは神聖なディガール神殿ですよ？」

しかもここは清めの振りかご、許可あるものしか入ることの許されない場所に

どうして人が？」

「知らないよ、知らないけど、いっぱい血が出てるのよ」

あれ、何だ……なんだか妙に話す女神様だなあーまあーいつかどうせ俺はこのまま……

「エエー！ 姫さま、ちょっと待つて下さい。本当に人が……しかも男の人気が

ハア……なんだかめまいが……」

バタン・・・何かが倒れる音が耳に入り、視界に映る少女が額に手を当て

嘆息を漏らす。

「アイシヤ……もおー使えない人ね、あなたはここで寝てなさい。

この方は私がお医者様のところへ連れてまいります」

同時に俺の体は少女の肩に触れ、同時に俺は意識を失った。

1話・白い空闇（後書き）

深夜に書いたので少なめですが明日も出来れば更新します。
1500字くらいかな？ 多くて2500文字程度で書いていきます。

小説つと書つよりも気持ちを直接文章に書いてる感じ書きみたいになつてゐるナビ。よろしければ次回も「は意見ください。

俺の意識は眠りから浮上し、俺はゆっくりと目を見開いた。同時に景色が視界に写り込んでくる。

薄暗くて、よくわからないが、鉄格子と無数に天井にかかる蜘蛛の巣は目に捉えることができた。

しかし、どうして俺はこんな場所にいるんだ？ 確か俺は……俺は頭を巡らせ、うつすらとボケていた記憶を蘇らせる。

「あーあん時俺、女神見て……アレ？ なんで俺生きてんだ？」

うーん

しばし考える、頭に手を当てて考える。

同時に視界に白い包帯が写り込んだ。

しかしそれに全く見覚えがない。

俺はそれを何度か眺めていると、あの時見えた女神の事を思い出す。

主に会話の方を、俺はあの時死神みたいな、感じで女神が迎えに来たんだと思つてたけど

あれはもしかして……生きた人間だったのか？ だとすればあの部屋に隠し扉みたいな

感じの物があつたわけで、俺はそれを見つければ自分で自分の命を縮めてたわけ……

「ハア……」

俺はあの時必死に脱出しようとした。それも死ぬ思い出。

まあー実際死にかけたけど……まあーともあれ、俺は助かつたわけだ。

俺は軽く其場に立ち上がりノソノソと固いベットの上から降り、そのまま鉄格子の向こうを

眺めた。鉄格子の向こうには階段が伸びており、看守らしき人はおろか、人の気一つない。

てか、どうして俺はこんな場所に入れられてるんだ？ もしかして不法侵入とかで

しそうぴかれた？ つてことは……いや、ありえないぞ。よくよく

思い返して見れば

俺の視界に^{おんな}「写り込んだ女神」ともう一人の女、そいつらが何やら話してたしな。

確か、ここには神殿とか、神聖な場所とかなんとか、神殿で言えば神様を崇めているんだろうし

しかも俺が男だと知つて一人は何やら変な音を立てて地面に倒れて氣絶してたような……

まあーとにかく、俺の印象は恐ろしいほど悪いわけだ。

「さて、これからどうする？ おとなしくしてお咎め受け^{おとなしふく}て数日？ 数年？」

「ここで一人牢獄暮らし

……却下！ なんで俺がお咎めを受け^{おとな}らんのだー！ 俺は言わば被害者

ザビエールと白髪ジジイー^{おじい}の世界に送られて、あんな意味のわからぬ場所に

放置して、俺は悪くないぞ！ 絶対に……

「ダアー！ 俺をここから出してくれー！ 俺はわるくないんだよー」

沈黙、虚しく自分の放つた声が跳ね返り耳に入る。

それ以外の声は全くしない。

どうやらここには本当に自分が投獄されているようだ。俺はその場に座り込み、腕組みをしながら嘆息を漏らした。

「ハアー」

お手上げだった、鉄格子はサビもせず銀の光沢を放ち、壁は厚くとても手で掘つて脱獄、みたいな行動には出れない。

更に言えばあの時魔方陣を書くとき使つた血の量があまりに多く、今体がだるくて

仕方がない。俺はもともと運動神経がいいわけでも体力があるわ

けでもない。

正直一般人以下の身体能力をしていると俺は自負している。

再び俺は三度目のため息をついた。

「はあ……」

ため息と共に俺はそのまま冷たい地面に寝そべり再び眠りについた。

3話・牢獄の中（2）

アレからじれぐらいの時間が立つたのだろ……
俺は体の節々を動かし、体の具合を確かめるようにその場から立ち上がり運動をする。

数分その行動を繰り返していると、鉄格子の向いの側から扉を開くようなそんな音が聞こえた。

俺はすかさず鉄格子にしがみつき、来客者の来る方角を眺めた。数分後、来客者は俺の前に現れた。

髪は桃色、長い髪に白銀の瞳、背丈は165～168くらい？
かな

表情や仕草、それらを見て、彼女が俺と同じ歳もしくは、俺より年上のお姉さん？

に見える。服装は白色のローブを纏い杖のような物を手に持っている。

彼女の左右には活発そうな腰にナイフを所持した青髪の女と
きょろきょろ、とこちらを見て何度も目をそらす、拳動不審な橙
色の若い女が

立っている。俺はそれらの人たちを眺め細目で眺めフリーズする。正直なところ、俺は女子にとことん弱い、てか苦手だ。

世で言つりア充には分類されない草食系男子。昔から告白される側で

告白する側ではない。しかも告白されると、すぐにその場から逃げ、「

正直高校生になつた今でも余裕で逃げるし現実逃避する。
もちろん女がとことん嫌いってわけじゃない。ただ、苦手なのだ。
俺がフリーズしていると、中央に立っている桃色の髪をした女が
声を上げた。

「体調はどうですか？」

「あ……えつと、多分大丈夫……だと思つ」

それに彼女は頷き、女神のよつた優しい微笑みを漏らすと、続けて声を上げる。

「それは良かつた。あの時はびっくりしからいました。だつて人があんな場所に

倒れているんだもの、しかも男の方が

「まあ……いろいろあります」

「そつなんですか。いろいろ、そつです。ようねえーいろいろないとあんな場所

男の方が踏み入れるわけありませんもの」

俺はそれに頷き、彼女たちから視線をそらす。

これ以上彼女たちの顔を見ていると、完全に意識が飛びそうだったからだ。

こみ上げる心臓からの鼓動を抑え、俺は息を整える。

「姫さま、このようなどこの馬の骨ともわからぬ存在に姫さまの高貴なお言葉を

交わす必要はありません。それに尋問ならば、我々だけで十分、そうですね？」

「アイシヤ」

左側から声が上がると右側の方から声をが漏れる。

「え？ えつと……多分大丈夫……」

「多分つてねえーあんた……もう少しあつきりモノを言えないの？」

「えつと……えつと……大丈夫だと思います……」

「もうイイわ、とにかく姫さまはお部屋に戻つてください。朝の祈りの義に

姫さまがおいでになられなかつたら我々下々の者が不安をいだきます。

俺は声の行き交う鉄格子の向こうに恐る恐る田をやる。

すると、視界の片隅につなだれる姫と呼ばれる女の顔が映り込む。

同時にハブてるよに類をふくらませ、杖をブンブンと青髪の女に向けて

振ります。青髪の女はそれをいともたやすく避け、回避する。

しばらくの後、彼女の手に握られた杖は青髪の女にしっかりと掴まれ

動きを止めた。

「姫さま、お戯れはこれぐらにして、姫さまは祈りの場に向かってください」

「はあーはあーはあーわかったわよ……今日は私の負け、おとなしく引き下がるわ」

そう言って、田舎のローブを纏つた女は階段の影へ姿を消した

4話・牢獄の中（3）

青髪で短髪の女が声を上げる。

「さて、これよりお前の尋問を開始する。内容は大きく分けて2つだ
まずははじめに、どうやってここへ侵入した？ 第一にあの魔方陣
はなんだ？」

見たことの無い式をしていたぞ？ それらを詳しく説明するんだ」
命令口調の女、正直こういった女には俺は緊張も何もしない。
女の氣のあるやつよりも男氣のある女のほうが話しやすい。
しかし、それでも女には変わりないから首元を見て話す。

「俺つてさ、眠ると夢遊病の症状が出るんだよね。それも走ってそれを実行するらしいから
多分それで誰にも気づかれずあんな場所まで迷い込んだんだと思う。

それにあの魔方陣も多分俺が無茶苦茶に書いた適当な魔方陣だから
気にしないで、俺つてバカだからさ、魔方陣書くとき多分書くも
のがない

つてことで血でそれを書いたんだと思うんだよね」

正直なところこんないいわけで、この人達を納得できるとは考え
ていない。

しかし、突然神様に命を生き返らされてそのままあの場所に立つ
ていた、

なんてことを話しても絶対に信じてもらえないだろう。だから
とつさに口から嘘を吐いた。

同時に青髪の女が首をかしげる。

「すまないが、夢遊病とはなんだ？ 何かの病気のことなのか？」

「ああ、知らないの？ そつかーーえつと簡単に言えば寝てる時に
意識もしてないのにフラフラ立ち歩くことだよ。朝起きるとベッ
トで寝てたはずなのに

街の中で眠つてたり、家の隅で眠つてたりと、まあーいろんな場所で目を覚ます

病気だよ

「あーーそれって私一度経験あるよ？ でもあの……えっと……ホント小さな頃の事だけど」

「夢遊病ね……夢遊病の意味は分かった。だがどうやってこの神殿に入り込んだ？」

いくら夢遊病で出歩いたとしても、王国騎士団の検問や巨大な門がその進行を阻むだろう。しかし不審者の報告はおろか騒動すらない。お前はまるで

そこに湧いて出てきたようにあの場所に現れた。私はそれが納得できない

「それが一番夢遊病の悪いところだよね、動いてる本人には意識がないんだから

どうやってここへ来たのかわからないんだ。正直今ここがどこなのかもわからないんだよ

俺にはさ

「ここがどこだかわからない？ だと……我々の服装を見てもそれがわからないとは

お前はよほど辺鄙な場所から来たのだな？ それにその黒色の服、このあたりでは

田にしない素材をつかっているようだ。お前は一体何者でどこからやってきた？」

「そうそう、君のいったとおり、俺はかなり遠くからここへ来たんだよね。

ちょうど昨日の夜ここ街について起きたらここでもあーびっくりだよほんと

「……遠くから？ どのあたりからだ？ アラードール？ それともミレニアストル王国？」

はたまた、ロガール帝国の避難民か？」

彼女の口から漏れる国名は一切しらない。

「えつと、それ、俺はロガール帝国の避難民だよ。生活が苦しくて親も兄弟も親戚だつていながら、俺は一人である国をでたのさ」
あの国つてどこの国？ つと自分の付いた嘘に言いたくなるがそれを止める。

「どうか、ロガール帝国の避難民か……あの戦はひどいものだつたからな

多くの兵士が死に、多くの民が死んだ。私の兄もあの戦争で……」
彼女はどこか悲しげな表情を浮かべ、地面を眺めると、

「分かつた。お前の言葉を信じよう。しかしもうじばりへこの牢獄にいてもらうことになる

もともとお前が悪い人物でないなら開放する予定だつたしな

「それならさあ一今から開放してもなんの問題もないんじやない？」

俺は早くこんな意味のわからない場所から逃げ出したかった。
どうせ、ここは前の会話からして女ばかりに違いないからな、さつさとこの場から

離れて、悠々自適に旅して日記つけて、うまいもん食べて、昼寝してまた

歩いて、まあーそんな感じで旅がしたいな、異世界なんだし。

「すまないが、今は無理だ、今この宮殿には王族や貴族の皆様方が多く来客している。そこにお前のような怪しい者を出歩かせるわけにはいかないのだ

もしかすると、貴族たち、もしくは王族の機嫌を損ねて永遠に牢獄ぐらしにされるやも

しれないし、今は静かに時を待て
「静かに時を待つてつて、どれくらー？」

「そうだな……」

そこで青髪の女に黙つたまま佇んでいた女が声を上げる。

「えつと、それは……夕日の傾いた頃ですね。姫さまがそう言つて

ました」

「そうだ、アイシャの話つとおり、後10時間後の夕暮れ時がちょうどいいだら」

「そつか……まあ一無期懲役とかなつたら俺の人生終わりだしあとなしく

「ここにいるよ」

「そうだな、それがいい」

頷きながら彼女がそういうと、俺は頭を描きながら申し訳なさうにお願いじとを

「一人に言つ」

「あのそれ……もし良かつたら書くものと紙をもらえないかな？
後10時間近くここにいるわけだし暇で死んじゃつかもしけないからせ」

青髪の女は微笑を浮かべると頷き答える。

「わかつた。食べ物を運んだとき、一緒に紙とペンを畳かよつ」

「ありがと」

「では私はこれからお前の報告と祈りの儀に参加していく。
くれぐれもおとなしくしていろよ。」

「へへい」

そう言つと、一人は階段を登り姿が見えなくなつた。

「なんだ、結構いい人そうだな、あの人、まあ一どうでもこにいやどうせ、これつ生きの縁だしさ」

俺は鉄格子から離れ、硬いベットに寝そべると再び目を深く閉じだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3070w/>

気まぐれ勇者の召喚士

2011年10月31日19時03分発行